

サイロのある箱庭建築

—建築を支えるもの—

1220168 山崎 安耶香

指導教員 渡辺 菊真

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. はじめに

私の生家の裏地にはサイロがある。サイロへの興味をきっかけとして、サイロとともに住む自邸の案をいくつも作り、試行錯誤を重ねてきた。あるとき、固定した敷地の中で空間の配置、組み換え、創造などを幾度も行いながら何かを得ようとしていく姿が、どこか箱庭療法の治療過程のようだと思った。箱庭療法では、同じ箱の中に箱庭をいくつも作っていく中で、自己のイメージと対話することなどから治癒に向かっていく。その際、治療者がその内に見られる世界やストーリーを読み解き、理解しながらその変化の過程や成長を見守る過程で治療が進んでいく。本設計では箱庭療法と同じような制作プロセスで作られていく建築を、箱庭建築と呼ぶ。箱庭療法の作品の見方を活用し、箱庭建築の設計プロセスを分析することで、建築を支える何かが見えてくるのではないかと考える。

本設計は、箱庭建築の設計プロセスを箱庭療法の作品分析手法を活用して分析することで建築を支えているものが何かを考察する。

2. 箱庭療法と箱庭建築

2.1 箱庭療法とは

箱庭療法についての把握は木村晴子の『箱庭療法—基礎的研究と実践』を参考にした。

箱庭は、視野にすっぽりと入るような砂箱の中に、種々のミニチュアおもちゃの中から自由に選んだ素材で小世界を構成する自己表現活動である。それが治療状況の中で極めて有効で感動的な、内面のアピールとなり、治療者との関わりを深めるとともに、自己のイメージと対話しうる媒体となる。箱庭表現は多くの場合、治療の中で繰り返し制作される。治療者はその制作プロセスをいつも見守り、その作品に分析・解釈・推察などを行いながら治療を進めていく。



図1 箱庭療法の事例

2.2 箱庭表現の見方

箱庭表現を見る視点として次の5つが挙げられる。

系統的理解	シリーズとして見ていき、その変化と発展に注目する。
空間配置	枠内における領域の使い方やおもちゃの置かれる場所には空間の意味がある。空間象徴理論に対応して分析する。
統合性	全体から受ける印象がいかにもとまり、より高い全体性の統合へと進むのかに注目する。
テーマ	箱庭表現の中に一連のテーマを見だし、その変化に注目する。作品の中に何らかの視点を見出す。
使われたものの象徴性	おもちゃを、何かを表現するシンボルとして解釈する。

2.3 箱庭療法と箱庭建築の共通点と差異

箱庭療法と箱庭建築に共通することは、同じ敷地の中に対しておもちゃ（建築要素）を置いたり、組み替えたりしながら何度も作って変化させていくことや、いくつも作っていく中で何かを獲得し、全体性の統合などが行われていくこと、立体的表現として表れてくることなどがある。また、箱庭療法が治癒に向っていくことと同様に、箱庭建築においてもあるとき収束に向かい、その後は微差の修正程度になっていく。箱庭建築の治癒とは、混沌とした決め手に欠けるような状態から脱出し、全体として力のある建築になっていくことである。

一方、箱庭療法では箱の中には毎回まっさらな砂があるだけの状態がプレイルームという守られた部屋の中にあるところから始まるのに対し、箱庭建築ではすでに箱の中に地物が置かれた状態があり、1つの作られた箱庭にどう手を加えるかというところから始まる。また、箱庭建築では設計者の関心の範囲の変化に合わせて、枠外に描かれるものも変化していき、そこから影響を受ける。箱庭療法では用意されたおもちゃを並べていくのに対し、箱庭建築では置くおもちゃ（建築要素）を作り出す必要があり、その変形、合体、分解などが可能である。

これらを踏まえて、箱庭療法に差異に応じた読み替えや付加などを行い、箱庭建築を作っていく。

3. 箱庭建築の方法

3.1 箱庭建築の流れ

- ①箱庭建築の初期状態は、箱庭療法のまっさらな空間とは違い、これまでの時間の流れの中で人や環境などによって作られてきたものが、そこに何気なくある状態から始まる
- ②そこにあるものへの関心やそこでの体験などを通して空間を創造し、配置・構成していく
- ③出来上がったものが1つの箱庭建築案として蓄積されていき、それが新たな初期状態に反映されていく
- ④これらを繰り返し行い、あるとき箱庭建築の治癒を迎え、収束する
- ⑤作った箱庭建築案の全体に対して分析を行う
- ⑥分析結果から建築を支えるものについて考察を行う

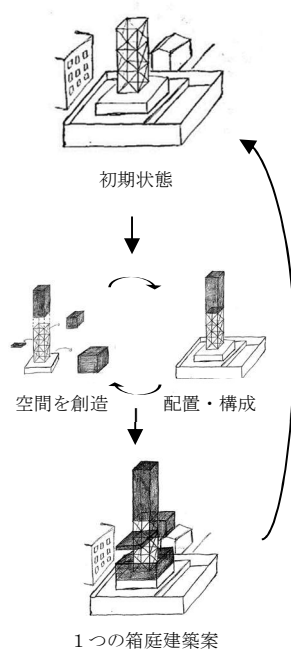


図2 箱庭建築の流れ

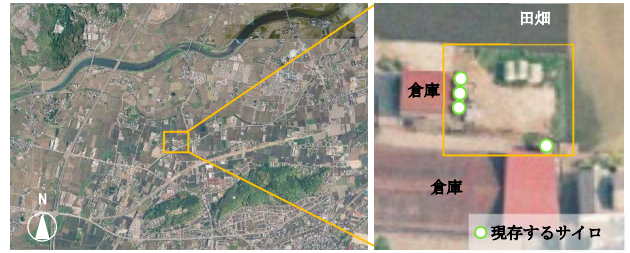


図3 敷地の航空写真
※国土地理院地図に対象敷地等を追記して掲載

サイロは、小さいころから見慣れた風景の中にあり、中は危険であるため、入ってはいけないとされていた場所であった。入ることのできない内側に少しの怖さと強い興味を持っており、それはいまなお膨らみ続けている。サイロの中に入りたいという強い思いをきっかけにこの場所で自身の住まいを考えることとした。



図4 敷地写真

3.2 箱庭建築の分析の視点

箱庭表現の見方を参照し、箱庭療法と箱庭建築の差異を反映した、箱庭建築の分析視点を以下に示す。「系統的理解」については、それぞれの分析項目を一連の流れとして、その変化と発展を追っていくことで対応させる。

分析項目	箱庭表現の見方との対応
地物と付加物の配置と関係性	空間配置
風景としての印象	統合性
描かれた人の状態	テーマ
地物からの連想と創造	
生成されたものの形態	使われたものの象徴性

4. 箱庭建築の制作内容

4.1 箱庭建築の初期状態

敷地は高知県南国市にある生家の敷地内の一角にある。かつては酪農をおこなっていた場所で、それに関連する建物などが残されている。敷地には現在は使われなくなった4体のサイロがある。敷地南側と西側には倉庫があり、北側と東側には田畑が広がっている。敷地内では人や自然の力によって、サイロの数の増減や配置の移動などが重なり、現在の様態となっている。

4.2 箱庭建築の設計

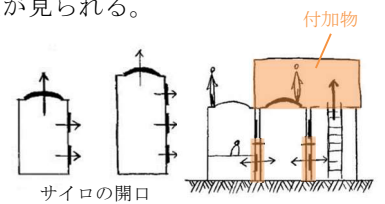
箱庭建築の変遷は、サイロの形態に無縁な直方体空間の付加から始まり、場所から切り離された状態でサイロを中核に据えた空間を創造し、それが場所と結合し、さらに広い周辺環境に連動したものになっていった。

これらは案の特性から、大きく5つの段階に分けられる。それぞれの段階に見られる特性を以下に述べる。

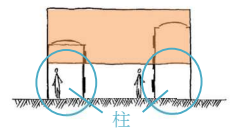
A) 初期の箱庭建築

初期には2種類の考えが見られる。

A-1) サイロ同士を短い通路でつなぎ、上部開口の先に別の主空間が置かれる。サイロ内を移動空間が占める。



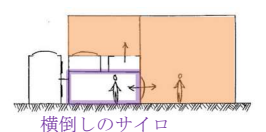
A-2) サイロを柱と見立て、それに支えられた別の主空間が作られる。



B) 中間期の箱庭建築

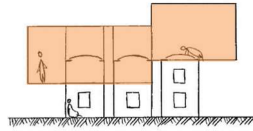
初期の2種類の考えがそれぞれ広げられていく。

B-1) A-1の考えにサイロの組み換えの検討が加わる。横倒しにしたサイロがあり、その先には大きく背の高い空間が置かれる。



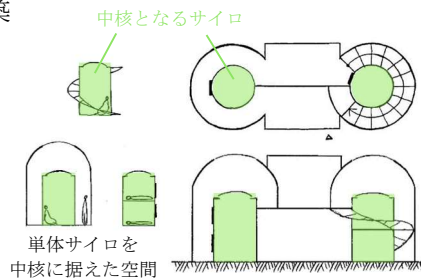
卒業論文概要

B-2) A-2 の考えから変化し、サイロに支えられ、浮かんでいるかのような空間が作られる。サイロの内部が、見る・感じるなど機能と切り離された空間となっているものが見られる。



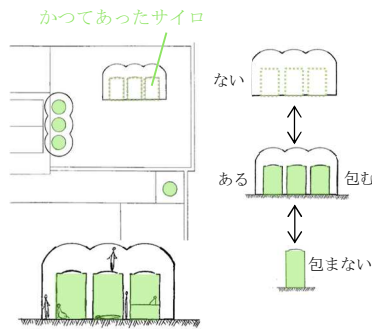
C) 転換期の箱庭建築

敷地や場所に関係なく、単体のサイロを中核に据えた空間を創造し、その組み合わせによって全体が作られる。



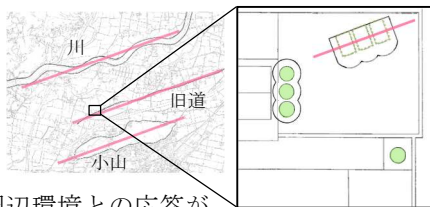
D) 収束期の箱庭建築

サイロの場所が固定され、かつてその場にあった横たわるサイロが現れる。場にあるサイロを中核に据え、そこに衣をまとったような形態に修練していく。



E) 完成期の箱庭建築

D からの見えがかり上の変化は微差となる。しかし、横たわるサイロの向く方向が変わり、周辺環境との応答が広がりつつ、統合されていく。



4.3 箱庭建築の分析

分析した結果を項目ごとに示す。

<地物と付加物の配置と関係性>

- A,B) 地物（サイロ）は付加物へのアクセス経路や付加物を支える柱として配置されている。付加物が主空間であり、地物がそれに従属する空間という関係である。
- C) 地物（サイロ）を中核に据え、それを包むような形で付加物が配置される傾向が強く現れている。一方で、敷地や場所からは切り離されており、配置に場所は伴わない。

D) Cを前提にしつつ、地物（サイロ）が場所とともにあることが意識され、敷地の中でそれぞれのサイロの占める位置が強く意識されている。また、それによって「かつてあった」地物が「ないサイロ」として見出され、時間（記憶）が空間に導入される。3種のサイロはそれぞれ対比的な関係にあり、そのことが空間の意味を高めあっている。

E) D から大きな変化はないが、「ないサイロ」が敷地を超え、より大きな周辺環境にある軸に沿う向きで配置されることで、空間認識に大きな広がりを与えられる。

<風景としての印象>

- A,B) 地物と付加物がそれぞれで形作られ、風景としてバラバラな印象を与えており、全体として伝えたいものがあまりわからない。地物のサイロを付加物が圧迫しており、物理的にも風景的にもしんどさを感じる。
- C) サイロの存在や形は感じられるが、敷地や場所と切り離されているため、風景としては成立していない。
- D) 3つのサイロの集合体がそれぞれ適切な場に収まることで元来の風景から作り出された風景として成立している。「ないサイロ」の存在によって風景の中に時間性が持ち込まれている。
- E) 「ないサイロ」がより大きな周辺環境と関係することで風景が大小入れ子状に重なり合っている。

<描かれた人の状態>

- A) 最初に想定されている人の動きは登る、サイロ内に入浴する、サイロ内で移動するの3種である。
- B) 地物（サイロ）から付加物の空間に入出入りする際の体験が描かれる。サイロ内が室、留まる空間になっている様子やサイロをいろいろな角度から体験する視点が見られる。
- C) 地物（サイロ）と付加物によってできる空間を体験する様子が描かれる。
- D) サイロを包む形には多くの体験がある。サイロ内で落ち着く、寝る、入浴、サイロ上に登る・ドーム状の屋根を近くで感じる。サイロ横でサイロの存在感を感じる。サイロの隙間で狭いところを通り抜けるなどの体験がある。

<地物からの連想と創造>

- A,B) 住機能の成立に重点が置かれ、サイロからの連想作用が働いていない。テーマを見出せていない。
- C) 地物（サイロ）が中心にあり、そこから連想される空間が創造される。ただし、場所を持たず、発想は浮遊状態にある。

卒業論文概要

D) 地物（サイロ）中心の空間にそれぞれの場所が与えられ、各空間の担うべき役割が明確になる。記憶の場に住むというテーマが見出される。

E) 敷地の背景に地域空間という大きい広がりや導かれ、個人の記憶を超えた時空の中にあることが示される。

<生成されたものの形態>

A,B) 付加物は直方体であり、地物（サイロ）の形態とは独立性が強く、形態の象徴性は無い。

C) 地物（サイロ）を中心に、付加物が包む結果として、サイロのような形態が生成される。サイロそのものは見えず、サイロを暗示する形態となる。

D) 地物を中心とした3つの集合体が場所を含めて形態を示す。場所と連動することで形態の意味・象徴性が高まる。

E) 関係を持つ領域が広がり、Dの深化が図られる。

4.4 考察：建築を支えるもの

分析結果から考察を行う。

まず、A,Bの時期の箱庭建築の建築形態の中心は無い、あえて言うならば機能であり、Cの時期以降は建築形態の中心はサイロとなっていることが読み取れる。この設計の大きなテーマは「サイロとともに住むこと」であり、テーマに合致するものが建築形態の中心をなすとき、テーマが見る人に迫る建築としての力をもつと考える。

次に、風景的な視点で見たとき、バラバラで雑然とした印象や付加物からの圧力によりしんどそうな状態から、適切な場所に適切な形態の空間が付加され、3種の空間・形がそれぞれを高めあい、元来の風景から作り出され、それを発展させたような風景になっていったことが読み取れる。Cは敷地や場所を持っておらず、このときそれは建築ではなく、あくまで発想であり、これが場所のなかにある存在として考えられるとき、はじめてそれは建築物として成立する。建築物には必ずそれが存在する場所があり、その場所と連動した建築は、風景としての全体性を獲得すると考える。

次に、図の中に人が描かれているものは、案が新たな発想に展開されるときと人の生活、内部プランを考えているときであることが読み取れる。これは、人がどのようにその空間で体験できるかという視点から空間創造をしているといえる。また、Cまでは内部空間に視点があり、Dではそれが配置された外部空間に目が向けられ、そしてEでそれをさらに取り巻く周辺環境へ視点が広がっていき、これは建築が内部空間、外部空間、周辺環境へと連続的なシークエンスを獲得していったといえるだろう。そのシークエンスすべてが生活情景となる。

また、Dで「ないサイロ」が空間化されたことで、そこには時間が封じ込められ、時間が空間化されたといえるだろう。建築は現在だけでなく、かつてあったものや記憶のなかにある風景を、空間として象徴的に示すことができる。つまり、建築は実際に目に見えているものだけでなく、形の存在しないものや実在しない風景を空間化することが可能なのである。

最後に、サイロを包み込むような配置はもともとサイロのもっている領域的な場を見える形にしたものであると考えられる。建築は新たな空間を作っていくが、それはそこにある潜在的なものを形にし、空間化する行為であるといえるのではないだろうか。またDで具体的な敷地と結びつき、Eでそれを中心とした周辺環境へと領域は入れ子状に広がっていった。仮に広がる領域が神秘的なものや接続する場合には、それは異次元というものにまで接続することになる。

以上のように、建築を支えているものは、テーマに合致するものが建築形態の中心に据えられていること、建築の存在する場が必ず必要であること、内部から外部、周辺環境へと連続的にシークエンスが展開されていくこと、時間やそこに存在しないものまでも空間化可能であること、建築は具体的な敷地から周辺環境へと領域の入れ子的広がりの中にあることが考えられる。

5. まとめ

箱庭建築の設計プロセスを箱庭療法の作品分析手法を活用し、分析することで建築を支えるものが幾つか見えてきた。

箱庭建築を通して、建築を支えているものは、テーマと合致する建築形態の中心、建築の存在する場、内部から外部、周辺環境へと連続的に展開するシークエンス、時間やそこに存在しないものまでも空間化可能であること、領域の入れ子的広がりがあることに改めて気づくことができた。この気づきをきっかけに、建築の本質的な部分に目を向け、建築思考を深めていきたいと思う。

6. 参考文献

木村晴子, 箱庭療法—基礎的研究と実践, 創元社, 1985.
サイモン・アンウィン, 建築デザインの戦力と手法 作品分析による実践トレーニング, 彰国社, 2005.

国土地理院の地理院地図電子 Web (2月7日取得)

<https://maps.gsi.go.jp/#15/33.587424/133.635578/&base=ort&ls=ort&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0fl&d=m>